天の河

京城 大山 督

青く澄んだ空には
美しい星がぴかぴか輝いてゐる
あそこへわたしはこの唇をおしつけたい
さうしてはげしく泣いて見度い

あの星はわたしの愛する人の眼だ
絶えず瞬き乍らかゞやいて
わたしにやさしく挨拶する
青く澄んだ大空から……

……(ハイネ——生田春月譯)

『人間の眼』つて不思議なものです。土の堆高きにすぎざるを見て、直ぐ英雄の偉容をうつろへ、花位るにすぎざるを見て、はや乙女の顔をおもひうかべる……それこ云ふのも、此の眼なるものに情緒こ稱する頗るミステリアスなグラスがあつて、もの皆このグラスを透すこき、得も云はれぬデリケートな作用を其處に起すからではないでせうか。ある詩人は曾てこれを『死ぬこころのある美しい星』だこ申しました。『死ぬこころのある美しい星』然らばこの『死ぬこころのある美しい星』が先づ死ないいこ云つてよい天つみ空の星々こ瞬きを交し始めたのは何時頃の事かこ申しますのに、それはバビロンの文化よりも、エヂプトの文化よりも、支那の文化よりももつこもつこ遠い昔の事だつたやうで御座います。

その頃にもこのデリケートな作用は無論あつたので、以來、實在こしては熱球乃至炎塊に過ぎない筈(?)の星辰が時にさまざまな感念の對象こなり情操の媒介物こなつたものです。

遠く離れて逢ひたい時は、月が、鏡になればよい

こ云ふ民謠等はその好適例だこ思ひます。それ許りではありません。現今、多少なりこも天文に趣味を持つて居る者の情想眼には、凡ゆる個々の星々が素晴らしい魅惑こ情緒こを含んで映ろひ、一種異樣な昂奮をさへ伴つて感ぜられるのです。そしてその最も『押迫つた魅惑』に輝くのは私は夏であるこ思ひます。

オレンヂがゝつた濃黃色に輝くアークチウラスこ云ひ、凄艶な傳說を祕めて流れゆくアリアドネの星冠、それを淵ぞる星々の燦々たるこ云ひ、クワツこみひらいた野獸の眼のやうなアンターレスの赤爛々たるこ云ひ、其他凡てが(薄絹の帳りのやうな、あの物柔らかな夏の宵空を透して瞬くこき)情趣的で求愛的で向ふから——つまり星そのものから仰ぎ見る者の心に押迫つて來る魅惑を

齎らして居はしないでせうか。

『押迫つて來る魅惑』……さうです。夏の星の光りには優しく懐しくも亦親しみ易い情緒か溢れこぼれて私達觀望者の胸ミ心にヒタヒタミ浸りこんでくるのです。

が、段々世の中が涼しくなつて十月の始めミもなれば今迄押迫つて輝いて居た夏の星々は次第に西の空に追ひまくられて、振り仰ぐ中天高く澄みかへる星の瞳は……ライラ座のヴエガにしろ、アキラ座のアルタイルにしろ、デルフイーナスのダイヤモンドにしろ、今迄ミは反對に私達の魂を、詩情を、情想を惹つける魅惑をおびて宛も、私達の求める何物かを待つが如く、つんミすまして瞬き始めます。果然私達の心は彼等の思へるが儘、遠い世界に引摺られ出す。私達はすみ渡る秋の夜空の星々を仰ぐ度に彼等の魅力に惹付けられて魂ミく肉體を離れ我を忘れてあてごもなき天界のそゞろ歩きを始めるのです。

或はオルフユースの琴に聽き惚れ、或はキグナスの悲涙に貰泣し、或ひは美しいフリジアの青年を想つて見度く或は淒らはれたトロイの少年に同情して見度り、ミもすれば巨人テイフオンを思ひつ切り憎んで見度りする。

今や小さき魂は方寸の形核を大いなる宇宙星辰の愛に溺れて夢の如く幻の如しフワリフワリミユートピアンのフエアリー・ランドを逍遙ひ歩くのです。美しき星宿の情愛は相爭つてこの可愛らしき魂をむかへ、導き、歡迎して呉れます。

ですが皆さん、

皆さんは、以上の情味深き諸々の星々のなごやかな光りを仰ぐ度に必ずや皆さんの眸底を横ざまに、皆さんの魂のドン底に映じ來つて模湖ミして棚びく光りの帶のゆかしく、尊く、神々しくつきせぬ流れを見るここでせう。それは云ふ迄もなく天の河であつて、私の今や語らんミする處、また實にこれに外ならないのです。

星くづの、つゞひて永遠に
果てしなき
果てし流るゝ天の河かな

その模湖たる、その寞然たる、何の用意もなくふミ振仰ぐ私達の心を瞬間にして他愛もなくひつ攫んで否應なしに宇宙の深みへ引摺つてゆく。……大方の秋の星が、いやに惹付ける魅惑で不可抗的な微笑みを投かけるのも全くこの天の河ミ云ふ本尊の及ぼす影響に過ぎないのではないかミ思はれる程の素晴しい力で罌粟粒程な私達の魂を、——宛も磁力にひかる鐵粉の如く、また長鯨に吸はるゝジヤコのそれの如く、何の造作もなく易々ミ宇宙の深みへ引つぱりこんでしまひます。

そこで、大いなる光彩の殿堂は私達の魂の周圍を取り圍んで不死の瞳、嬋妍

を競ひ、星辰の光愛一身を廻つてキラビやかに輝く。寶玉の無盡ミ微笑む星の姿は千差萬別、情涙を一身に鐘めて昂ぶつて見え、億萬の銀砂ミちりばむ星の裝ひは己れ一人の爲の裝ひである。……ミ茲に至つてさゝやかなる私達の魂はそこら、こゝらに瞬く星辰をすつかり自分のお友達にしてしまつて、これが晝の中御厄介になる日輪大王の畏友であるこミも忘れて、話しかけ、想ひをかけ果ては追掛けて走り廻る。

あゝ寔に、宇宙の果てに打ち建てられた光りの大殿堂——天の河は私達にきよく、尊く、うるはしい魂の洗禮を與へてくれます。私達の宇宙の屋體骨である天の河は自分達一家族の一員である太陽の、仔星である地球のかすかな厘デコ内至毛ボコの上に住んで居る私達の眼前に、その偉大なる、その雄麗なる、その莊嚴なる、その神祕なる千古の美觀、萬世變らざる恣態をうつろへて居るのです。

そして、あの謎のやうな乳白色の光りの流れをみつめて居るミ、何だか

あはれ人の子よ、いミも小(ささ)やかなる存在の主よ。
このわれを解せよ、
われを解するは卽ち宇宙を知るの第一歩なれば。

ミでも暗々裡に囁やいて居るやうにさへ思はれるではありませんか。

皆さん！

私達はこゝに、

『天の河が何んだ。遠くから見れば蚊の涙程にも光らんぢやあないか』等ミ云ふ生意氣千萬な威らがりを云ふのを暫らく見合せて、何も知らない、純な幼な兒の如うな氣持に立返つて、コスモスの花にでも埋もれ乍ら、この絕大なる宇宙の素晴しい眺めを、ひミつ思ふ存分みつめて見やうではありませんか。

ぞんな感慨が涌き起るこミか？ぞんな昂奮が齎されるこミか？

あゝ實に、この天の河の美しさを望んでその不朽の殿堂の探索に耽り、不滅の星靈の陶醉にひたる事の出來る私達は幸福です。ラビンドナード・タゴール翁によつて歌はれた『天の河に溢るゝ歡喜の洪水』その歡喜の洪水に身を任ね魂をひたらせて涙ぐましい程の慰安ミはち切れるやうな愉悅に生きてゆくこミの出來る私達がこの世に於ける祝福されたる幸福者でなくて何でせう。

天の河が私達に與へてくれる「永遠の靈氣」それは決してこの地上に於て求めるこミの出來ない尊い“精神の感激”であります。天の河が私達に吹掛けてくれる「神祕の靈感」それは到底この微塵星に於て感ずるこミの出來ないえがたい“情緒の衝動”であります。

天の河！天の河！あゝそれは何ミいふきよらなる天界の魅惑の權化、何ミ云ふ不思議なる人生の疑惑の象徵なんでせう。

「宇宙ミは何ぞや」

ミ題して曾つて山本先生が書かれたお話の末尾に

……今日のやうに、人間があつちこつちに專門を分けて仕事をして居りますけれごも、ごれ程の人、ごれ程の地位のある人でもその思想の終局は滿足に宇宙の問題が解けた時であります。

ミ云つて居られますが全くその通りだミ思ひます。千種萬樣ありミ凡らゆる事務に冗漫に時ミして出沒する大眞理の方影を追ふて、世の中のクエスチョンマークミ云ふクエスチョンマークが殘らずピリオツドに分解されつくさない中は、眞に嚴正なる意味に於て「これが正しい」ミは云へない理窟である。同時にいくら研究しつくしても鷄卵だけではそれが決して親鳥の解剖を意味しないミ同じく、いか程地の理をきわめやうミも天の時に矇かつたならばこれをしも全き研究であるミ云ふこミは出來ない。親鳥の研究が如何に重要なものであるかを知つて居る人には今更天文の有意義云爲を口にする迄もないミ思ひます。

けれごも、兎角浮世はひろいもので如何かするミ「杞憂がなければ天文は要らない」位に乙に極めんで居るミんだ杞人が居るのには困ります。曾て水野さんのお話に天の河に水があるかミの奇問を發した人があるさうで、成程名が河だから水があるミでも思つたものでせう。殊更オンが雨の河に通ずるのは妙ですなんて洒落て見た處で何にもなりませんが、それにしても斯う云ふ考へを持た儘、ラジオ入りの空氣を呼吸して居る人が尠からず居るミいふのは寔に歎かはしい事です。

（前略）　有窮のみを知つて無窮に對する憧憬れを持たぬものは呪はれてあれ。金錢、物慾、等、等、さうしたものゝ樂みはごんなに多くミも要するにごこまで行つても有窮だ。きりがある。きりがあるものを、きりがなく求めやうミするミころに無理が出て來る。一寸のゆミりもない。秋の空を眺めよ。秋の夜の星を眺めよ。そこに底の知れない神祕がある。この神祕が一體宇宙のごこに初まつてごこに終るか。誰も知らない。まこミに無窮だ。際みのない廣い空だ。たゞその限りなく廣い空の胸に向ふミ、あらゆる人の悲しみは洗はれ、歎きは慰められる。そしてそれを憧憬れる人々の心を高くし靈をすまし、あらゆる塵界のいさごさから刹那の汚れをすつかり洗つて吳れる。そして人は、この無窮なものに對して、初めて限りのない滿足を感ずる。この刹那の法悅境こそは巷に惶々ミして歩いて居る人の、ミても覗き得ない別の世界でなければならぬ。そして、眞にこの歡喜に浸つた人々は、たミへ井戸へ落ちたにしても（註。星を眺めて歩いて居る井戸に落ちた昔の哲人を諷したので、この論文の初の方に書いてありました）この美しい、高い天象を眺めて居たこミをおそらく決して悔いないであらう。今日の社會は、自然ミ云へば必ず山のみをいひ、海のみを指す。天象そのものに接觸する喜びは全く度外に棄てゝ了はれたやうだ。（中略）秋が立つ、いたづらに惶々たる都市人よ、秋風が吹く世界のみにはせめて一夜

の詩人たれよ。”と。本年８月22日付けサンデー毎日の評壇に於て「秋が立つ」なる名題の下に千葉龜雄氏は語つて居られますが、何と皆さん！私達も亦この興味深き、氏の感想に衷心からの同感をおぼえずには居られないではありませんか。

一生涯に唯の一度もこの永遠性の表現である星辰の光涙を、天の河の魅惑を感ずることなく、あの莊嚴なる眺にすら碌々接する事なくして死んでしまふ様な人のあつたら、あゝその人は如何にか不幸でせう、恵まれざる果敢なき人生の持主でせう。それは宛も幼にして孤兒院に育たねばならなくなつた人のそれのやうに。

私はさう云ふ人達に一遍でいゝから、この、日輪をさへ容易く引摺つてゆく尨大なる光彩の殿堂裡に、コセコセした眼をむけチゞコマツた魂を沐浴させて

おゝ何と云ふ無盡藏だ。
これはまあ、この無邊際は一體どうしたと云ふのだ。
それに較べて
自分が今迄考へた事した事の凡ては
何と云ふチツポケな事だつたらう！

と叫ばしてやり度い。

そして永遠から見た人生、社會、自我の如何に微塵性に富み、如何に蜉蝣性に富めるかを考へる有意義、高い處から人生を瞰下して居るやうな、屈託のない傍觀者の氣持を時折り味つて生きてゆく幸福、宇宙觀といふ大きな土臺石の上に建築された素晴しい人生觀の貧乏搖ぎ一つせぬ氣持、絶えず或る大いなる存在に凭りかゝつて居る様な精神の安固安定、あゝそれらの幸福な天界の賜物を未だ享け得ざる人々にお頒ちしたいものです。

これから銀世界の冬夜にかけて星辰は益華々しい陣容を整へて來る。雪駄の音もチヤラチヤラと錢湯なんどの歸り途、フレアデスやオリオン達の懐しい姿に會へるのも、もう直きですね。お互ひに樂しいものです。

今や秋、涼風たけなはなる神無月、晩翠氏のうたはれた

銀漢高く星清く、神祕の色に包まれて、
天地微かに光る時

であります。仰望絶佳なる星靈の光の夢かと溶けし天の河を。では皆さん！御一緒に、心ゆくまでうつとりと眺め入りませう。

※　※　※　※　※

星くづの夢かと溶けて天の河
星靈淡く秋にかゝるれる